四国農学連報

第26号

発行者
四国地区農業大学校
学生連盟
編集
徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校 学生自治会

農大での二年間

四国地区農業大学校学生連盟会長
徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校学生自治会長
藤本一輝

徳島農大に入学してはや二年が経とうとしています。今思うと私の大学生活は自治会長としてたくさんの人に支えられてきたものでした。農業高校ではなく普通科の高校に通っていた私は、高校三年生で進路に悩んでいる時に、知り合いから徳島農大の存在について教えてもらいました。実家は板野町というところで人参の栽培をしている農家だったので、徳島農大に行ってみたいという思いが強くなり、入学することに決めました。

農大入学前の私は人参の栽培については多少分かりましたが、他の農業に関する知識はあまりなく、農業高校出身でもないので正直ついていけるか不安でした。ですが、仲間や先生方に助けられ人参以外の作物の栽培方法や高度な農業の技術や知識を深く学ぶことができました。

自治会に入ることになったきっかけは一年生の春、当時の自治会長に副会長になってみないかと誘われたことでした。最初は断りましたが、何度も誘われるのでしぶしぶ受けてみることにしたというのが実情です。一旦は引き受けてみたものの、農学連の当番県をすることになっており、自分達が二年になる翌年度には中国四国ブロックプロジェクト発表会、四国農学連スポーツ大会、四国ブロック意見発表会の運営などが予定されていました。それを聞くと正直しんどいなと急に不安な気持ちになりました。人前に立って話すことや、なにかのリーダーになるということを避けて生きてきたので、本当に私に務まるのかと正直自信がありませんでした。しかし、周りの仲間や先生方の後押しもあり、一年の副会長としての仕事は成し遂げることができました。

二年に進級すると自治会長に任命されました。副会長のときは会長の指示に従っているだけで良かったのですが、今度は自分から考えて行動していく必要がでてきました。そこで、自分から進んで行動するように心がけ、先頭に立って行動することでみんなを引っ張っていこうと決めました。新入生歓迎会やスポーツ大会といった行事が近づいてくるたびに、日々プレッシャーで押しつぶされそうになり、先輩方がしてきた様にしなければといった不安でいっぱいでした。すぐにでも逃げ出したい思いでした。

特に徳島農大の最大のイベントである農大祭では、新入生歓迎会、収穫祭などとは違い、身内の人だけではなく外部からも業者やお客様がたくさん来るので、失敗は許されないという思いが強くありました。農大祭当日はもちろん、農大祭前の一週間ほどは準備でとても忙しく、本当に農大祭ができるのかといった不安やプレッシャーでやめたくて仕方がありませんでした。しかし、みんなと話し合いをかさねたりパソコンに向かったりしながら、少しずつ前進できたと思います。自治会の仲間や模擬会社「そらそうじゃ」の人たち、それ以外の二年生、一年生や担当の先生方の協力もあり、みんなで一丸となって無事成功させることができました。自治会長になったおかげで行事などうまく実行できたときの喜び、自治会長としての責任感、どんな時でも頼りになる仲間や先生方の存在などに気付くことができました。とても貴重な経験を得ることができたと思っています。

徳島農大に入学してできた仲間たち、そしていつも優しく教えてくださった先生方にはとても感謝しています。農大で学んだことはこれからも忘れません。忘れないと思います。本当にお世話になりました。これから勤める就職先でも、農大でのこの経験を活かして頑張っていきたいと思います。

目指せ！「三方よしの農業経営」

徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校　校長　葉柳清照

最近、SDGs（エスディジーズ）という言葉をよく耳にするようになりました。ご存知の方も多いと思いますが、SDGsは、二〇一五年の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」であり、豊かさを追求しながら地球環境を守り、人々が人間らしく暮らしていくための共通課題として設定された一七のゴール（目標）と一六九のターゲット（達成基準）を示したものである。

私たちの社会が「環境」から生み出される様々な物を活かすことで成り立っていることに鑑みれば、「環境」は全てのゴールの土台であり、環境を持続可能なものとしなければ他のゴールの達成は望めないと考えられている。

特に、農業は、自然（環境）の恵みを利用して食料を生産する環境と密接に結びついた産業であることから、持続可能な形で農業を発展させることは、ゴール達成に向けての取り組みとして大きな意味を持っている。

生産性の向上を図りつつ、人や社会に優しく、環境への負荷を可能な限り軽減した持続型農業の経営を継続していくことは簡単ではありませんが、環境への意識が高まる中、見方を変えれば、チャンスが到来しているといえるのではないだろうか。

再生可能エネルギーの利用やエネルギー効率の高い機械・設備の装備を前提とし、ICTやAIの活用などいわゆるスマート農業技術の導入などによる生産性の向上、IPMや施肥効率化など環境負荷低減技術に取り組むことで、栽培面での課題はある程度クリアできるのではないだろうか。

問題は、技術導入などに要する経費負担の増加と、それに見合う収益をどの様にして確保していくかである。

持続型農業や環境に配慮した農業については、エコファーマーやGAPが連想される。しかしながら、現状では、どちらも生産者サイドの視点から構築されたシステムとして捉えられがちであり、一般消費者から広く認知され、共感を得られるまでには至っていないようである。

経費に見合った収益の確保。この課題を解決するためには、消費者から認知され、いかにして共感を得られるか。つまるところ、価値が正当に評価され、価格に反映されるかどうかにかかっている。

この点に関しては、行政機関や関係団体などの支援・後押も当然ながら必要であるが、消費者との交流やSNS等を活用した情報発信など、個別の生産者が行う啓発やPR活動などを通じ、消費者の当事者意識・共感（持続型農業で生産された農産物を買うことで、身の周りの環境保全に貢献している）を呼び覚ますことが重要になってくると思う。

幸いにも、近年、社会や環境に十分配慮された商品やサービスを価値に見合った価格で買い求めることで生産者等を支援する「エシカル消費」の動きが活発化しており、こうした動きと連動することで、新たな展開も期待できると感じている。

最後に、将来、就農を目指す農業大学校の学生諸君には、世の中の動きを敏感に察知しながら、瑞々しい感性で知恵と工夫を凝らし、「売り手（生産者）によし」、「買い手（消費者）によし」、「世間（環境）によし」、「三方よし」の農業経営の確立を目指してもらいたい。

自治会長として

愛媛県立農業大学校
総合農学科　二年　果樹コース
山藤慶富

一年生を終える頃、自治会長選挙があり、果樹・農産・畜産の各コースから選出された代表者四名が、それぞれ選挙演説を行い、その後の投票で私が自治会長に選ばれました。最初は「信じられない」「自分にできるだろうか」など、マイナスな考えしか頭に浮かんできませんでした。ですが、選ばれた以上、自治会長として恥じないようにきちんと任された仕事をこなし、農業大学校をより良くしていけるよう努めたいと思いました。

自治会長としての最初の仕事は、卒業式の送辞挨拶でした。これまで送辞を読む経験などなく、緊張してガチガチになっていたのですが、お世話になった先輩方をきちんとお送りしたいと思い、私なりに頑張ってみようとプラスに考え、無事終えることができました。これが、私が自治会長として第一歩を踏み出せたと実感した瞬間でもありました。

農業大学校での自治会活動には、高校生を対象とした一泊二日の就農啓発講座、四国農学連スポーツ大会、収穫

祭などがあります。

一つ目の就農啓発講座では、高校生と食事をしながら情報交換や交流を深める意見交換会があります。私も高校生の時にこの講座に参加したのですが、人見知りということもあり、周りの人とうまく打ち解けることができず、一言も話すことなく終えたという苦い経験があります。その経験から、今度は自治会長として高校生に農業大学校で楽しい時間を過ごしてもらえるよう和やかな雰囲気づくりに努め、農業大学校の良さを私なりに伝えることができたと感じています。

二つ目の四国農学連スポーツ大会は、今年度は徳島での開催でした。昨年度は、野球・バレーボール・バドミントン・卓球の四種目すべてで優勝という優秀な成績を収めました。今年度は、残念ながら四種目制覇はできませんでしたが、一年生と二年生で力を合わせて競技に取り組み、日々のクラブ活動の成果が十分発揮できたと思っています。

三つ目は、農業大学校の目玉イベントでもある収穫祭です。私たち学生が丹精込めて育てた農産物販売の他、餅まき、子供たちに人気の高い収穫体験やクイズラリー、農業機械展示等を行い、大人から子供まで幅広い年齢層の方々に楽しんでいただけたと思っています。今年度も三千人余りの多くの方々に来場いただき、農業大学校や私たち学生の日々の活動を知っていただくことができ、とても嬉しく感じています。今後も収穫祭が地域の方々に愛されるイベントであってほしいと願っています。

振り返ってみると、農業大学校へ入学してから色々な行事や出来事があり、あっという間の二年間でした。入学した頃は、意見を言うことはおろか、人と話すことにも抵抗があり、人前に出ることが嫌いだった私ですが、農業大学校で寮生活や実習、そして自治会長という大役を経験する中で私自身大きく成長できたと感じています。とはいえ、未だに周りに迷惑をかけてしまうこともある未熟者です。ここまで私を支えてくれた友人や先生方、そして家族に感謝の気持ちでいっぱいです。農業大学校で二年間過ごせたこと、自治会長として色々な経験ができたこと、本当に良かったと思っています。皆さんありがとうございました。

次代の自治会長にはこれまでの伝統や思いを引継ぎ頑張ってほしいと思います。

最後になりますが、農業大学校の益々の発展を強く願っています。

農業に出会って変われた自分

愛媛県立農業大学校
総合農学科　一年　農産園芸コース
青野　冬哉

私は、農業大学校を卒業後、実家のある西条市で野菜を中心とした農業経営をしたいと考えています。それは、農業を通じて様々な人と触れ合い、その人たちを笑顔にしたいと考えるからです。

正直私は、高校に入学するまで農業にそれほど興味を持っていませんでした。それが、高校一年の時に先生から勧められて参加した、「西条市老人クラブ連合会の菊づくり教室」を機に、考えが少しずつ変わっていきました。

先生に勧められなんとなく参加してみた菊づくり教室。最初は何をどうして良いかわからず戸惑うばかりでした。見よう見まねで周りについていくのが精一杯でした。自分にできるのかと不安になり、逃げたくなることもありました。でも先生や周りの方々に支えてもらいながら学んでいくうちに、菊に魅了され、菊づくりに没頭していきました。回を重ねるごとに知識や技術が身についていくのがわかり、やりがいや楽しさを感じるようになりました。そして、三年生の時には、目標としていた校内菊花展の最高賞である「校長賞」を取ることができました。

それまで、人見知りで下を向いてばかりいた私でしたが、菊づくりを通して自信がつき、何事にも前向きに取り組めるようになりました。菊以外の植物への興味も膨らみ、「もっと知りたい」と勉強に励み、色々な講習会にも積極的に参加するようになりました。

そんな時に、就農を意識するきっかけとなる体験をしました。農家体験実習です。私がお世話になったのは、西条市でトマト、ピーマン、レタスなど野菜を中心とした農業を行っている鎌田農園です。鎌田農園ではユリなどの花卉栽培や加工品開発なども手掛けており先進的経営を行っていました。実習を進める中で自分も鎌田農園のような農業がしたいと思うようになりました。

そして、農業についてもっと学びたい、栽培技術や経営に関する知識を身につけたいと思い進学した農業大学校。ここでも私の就農への気持ちを大きく後押しする出来事がありました。一年

次の九月に行った北海道農業体験実習です。北海道農業体験実習は今年で五十四周年を迎える農業大学校の伝統行事で、私は士別農園に二週間ホームステイして研修を行いました。士別農園は、三十haという広大な土地にもかかわらず、有機農法を行っていました。強い信念をもち、農業に真剣に向き合っている姿を見て、私も将来そうなりたいと思うようになりました。

現在我が家では、祖父が中心となって一・三haの水田で米麦栽培を行っています。昨年、米の減反政策が終了したため、今の経営のままでは兼業でなければ生活が成り立ちません。

私は専業農家として就農したいので、士別農園のような有機栽培や鎌田農園のような多角経営にも取り組んで経営の安定化を図りたいと思っています。また、私の実家西条市には農業生産法人が多く、先輩農業者として憧れの存在です。いずれは私もその一員になりたいと考えています。

私の目指す農業経営を実現するため、これからも農業大学校で栽培技術や経営についてしっかり学んでいきたいと思います。

心が折れそうになってもあきらめず、前に向かって歩み続けることの大切さを菊づくりから学び、農家体験実習での色々な経験も私を成長させ、自信を与えてくれました。

これまで一緒に過ごした同級生、学校の先生や老人クラブの皆さん、実習でお世話になった農家の皆さん、そして、一番近くで支えてくれた祖父に感謝の気持ちでいっぱいです。

今までの経験を生かし、地域を盛り上げるために西条市で農業後継者として生きていきます。そして、高校の先生からかけてもらった「我が道を行け」という言葉。この言葉を胸に頑張っていきたいと思います。私の地域貢献は、感謝の気持ちからスタートします。

安定した農業経営を目指して

愛媛県立農業大学校
総合農学科　一年　果樹コース
清水俊行

私の実家は、八幡浜市で早生温州を主体とした柑橘栽培を営んでいます。柑橘三大ブランドの一つと言われている「川上共選」の一員で、約二・七haの園地を管理しています。私も父の後を継ぐため、農業の専門的な知識や技術を学ぶことができる愛媛県立農業大学校に進学しました。

私は将来、持続可能な農業を行い安定した農業経営を実現したいと思います。そして、消費者に自分のつくった果実を「美味しい」と言ってもらえるような柑橘農家になりたいと考えています。

その為に必要なこと、それは、時代の変化についていくことだと考えます。最近はインターネットが普及し、自分の好きなものをネットで簡単に購入することができます。農家も今のネット社会に対応していかなければならないのではないでしょうか。実際に、ホームページ等により情報を発信し、消費者に興味を持ってもらい、直接販売で収益を上げている農家も少なくないと思います。

一方、ミカンの消費量は年々減少しています。エアコンが普及したことで、冬につきものであった「コタツ」が無い家庭が増えているそうです。今後はこたつミカンという風景は見られなくなってしまうかもしれません。ミカンの消費減少には色々な要因が考えられますが、生活の中でミカンを手にする機会が減ったことが一つの要因であるとも言われています。ミカン離れを食い止め、多くの人にミカンを食べてもらうには、まずミカンに興味を持ってもらわなければなりません。私の地元には川上青年産業部という若い農家が集まった団体があり、ミカンに興味を持ってもらえるよう幅広い世代に働きかける活動をしています。私も就農後は団体の一員になり、同じ志を持つ仲間たちと色々な活動を行い、産地全体を盛り上げていけたらと考えています。

また、持続可能な農業を目指す上でグローバルギャップ認証の取得も有効な方法だと思います。認証を受け継続していくには毎年一定の審査費用などを払わなければならないデメリットもありますが、認証を取得できれば、食品安全、労働安全、環境保全に配慮した取り組みが「見える化」されて消費者に安心感を与え、たくさんの人に食べてもらえる可能性が高まると考えるからです。また、二〇二〇年に行われる東京オリンピックで扱われる食材は全てグローバルギャップ認証を受けて

いることが必須で、近い将来、海外輸出時の通行手形として必要になるという話も聞きました。将来自分もグローバルギャップ認証を取得して付加価値を付け、海外輸出も含めた販路拡大を目指したいと考えています。

固定観念にとらわれず、新しい事に挑戦していくことも重要だと思います。私の実家のある八幡浜は温州ミカンのブランド産地で、他産地に比べて高値で取引されています。私の家も温州ミカンの栽培がほとんどです。しかし、本当に温州ミカンだけを作り続けていたので良いのでしょうか。現在「愛媛果試第28号」という品種の柑橘が人気です（紅まどんなという名称で商標登録）。十一月末頃に熟期を迎え、ゼリーのような食感で食味も良く、高値で売られています。年々新しい品種が登場し、消費者の嗜好も変化していきます。消費者が求める果実づくりのため、日々挑戦と努力を続けていかなければならないと考えます。

私の目指す安定した農業経営を実現するために、農業大学校の二年間で専門的知識を深め、実習で経験を積み、経営感覚を磨いていきたいと思います。そして就農後は、美味しくて安全・安心な果実づくりに努め、柑橘農家として誇りを持てる農業経営者になりたいです。

北海道実習で学んだこと

愛媛県立農業大学校
総合農学科　一年　農産園芸コース
西岡　裕賀

私は六月四日～二十一日にかけて北海道士別市多寄町の野原寿圭さんのお宅で農家実習をしました。私は北海道に行ったことがなく、「どんなところだろう」、「寒いのだろうか」などいろいろな疑問を持っていました。先輩からの話を聞くと「畑の向こうの端が見えない」、「草刈りが多かった」などマイナスなことも多く聞いていたため、とても不安でした。

しかし、これからの人生で北海道に農業実習に行くことはもちろん、北海道に行くことも少ないと思ったので、将来のために、今後のためにしっかり学ぼう、堪能しようという思いで出発しました。

野原さんは耕種農家でカボチャ、トマト、大豆などを栽培していました。

作業の一つ目は、カボチャの定植でした。一つのほ場が二・五haもあり、縦二百五十m、横百mの圃場にずらりと並んだマルチを見た時、「これが噂の畑の向こうが見えないというやつか」と驚きました。「定植に時間が掛かりそうだな」、「いつ終わるのだろうか」などいろいろなことを考えました。それと同時に「がんばるぞ！」、「やってやるぞ！」という気持ちに切り替えて作業を行いました。

定植は全て手作業で、手作業で植えるカラス口という初めて見る道具を使いました。カラスのクチバシのような形をした道具で、持ち手を握るとクチバシが開くというもので、閉じた状態のクチバシの中に苗を入れ、そのまま地面に突き刺し、持ち手を握って口を開きながら抜き取ります。そして土寄せを行って定植完了です。単純な仕組みの道具でしたが簡単かつスピーディーに定植することができる優れ物で、こんな道具があったのだと感心しました。

作業は、膝を曲げたまま、お尻は着かずにずっと植えていくので、膝がとても痛くなり大変でした。その痛みに慣れるのには時間が掛かりましたが、カラス口を使って植えていく作業は、野原さんの方法を見て、自分のやりやすい方法を模索しながら、自分の方法を見つけたあとは、効率的に作業ができるようになり、途中からは、野原さんと同じスピードで作業することができるようになっていました。これにはとても嬉しく、作業が楽しくて、「もっと定植したいな」と思うようになりました。そして圃場一面にカボチャがずらりと並んだ光景を見て、「終わった！」、「達成感がすごい！」、「爽快な気分だ！」、「頑張って良かった！」などいろいろな感情が出てきました。

最初はマイナスなことも考えてしまいましたが、気持ちを切り替えて、自分に合った作業方法を模索して最終的に見つけることができ、臨機応変に対応できている自分に成長を感じることができました。

二つ目の作業は、トマトの芽かき、除草、定植でした。百mのハウスが五棟ありました。これだけの規模を見たことなかったので、とても驚きました。芽かきや除草、定植は実家や高校、そして農大でも行ったことがあったので、「量をこなすだけだ」と思って頑張りました。しかし、量をこなすというのは簡単なことではありませんでした。これだけの大規模のトマトを管理したことがなかったため、体が悲鳴を上げていたし、集中力を維持するのが大変

でした。

また、今年の六月の士別市は思っていたよりも暑く、日中は愛媛と変わらないぐらいでハウスの中の作業は辛かったです。その他に、暑かったと思えば急に雨が降って気温が下がったり、朝夕の気温が低かったり、ハウスの中が天国だと感じる時もありました。

私はこの北海道実習を通して、たくさんのことを学び、成長することができ、今後の学校生活や将来に向けて、良い体験になりました。今後、北海道でこのような実習をすることはないと思います。本当に貴重な体験になり、ここで得たものを大事にしてこれからに活かして行きたいと思います。

田舎塾での実習で学んだこと

愛媛県立農業大学校
総合農学科　一年　農産園芸コース
野地翔太

私は北海道実習で士別市上士別町の農業法人㈱田舎塾さんに約二週間お世話になりました。今回の実習を通して、本格的な農業に関わることができ忘れていた農業の大変さを改めて感じることができました。

田舎塾さんではカボチャを主に栽培されていました。カボチャは主に、九重栗、九重栗イレブン、栗将軍の三品種を栽培していました。その他にも、スイートコーンやビート、家の周辺ではニンジンやトマト、オクラ、スイカなどの野菜も栽培していました。収穫した野菜は農協と直売所に出荷されていて、農協にはカボチャを出荷し、直売所には自宅周辺で収穫した野菜を出しています。また、従業員も繁忙期は近所の方を雇用していますが、殆どは家族総出で行っていました。

実習初日から、カボチャの収穫でした。採り方は茎がコルク状に白くなっているものだけを収穫し、裏返して黄色い部分を面にして乾かします。ある程度乾いたらコルク状になった茎を専用バサミで調整し、生食と加工に分けていきます。その後、トラクターに装備した鉄コンテナの中に入れていきました。気を付けることは、傷つけずに入れること、決して投げたりしないことでした。この作業が二～三日続くことが多くて、しんどいと思うことはありましたが、徐々に慣れていき作業を集中して行えるようになりました。

作業時間は七時～十八時で、スイートコーン収穫を行う時は早朝五時から収穫、調整を行い、その後、カボチャ収穫をすることが主な一日の流れでした。降雨や露などでカボチャが収穫できない場合は、ハウス内や周辺の草取り、ハウス内の野菜収穫、加工用のカボチャ調整を行いました。

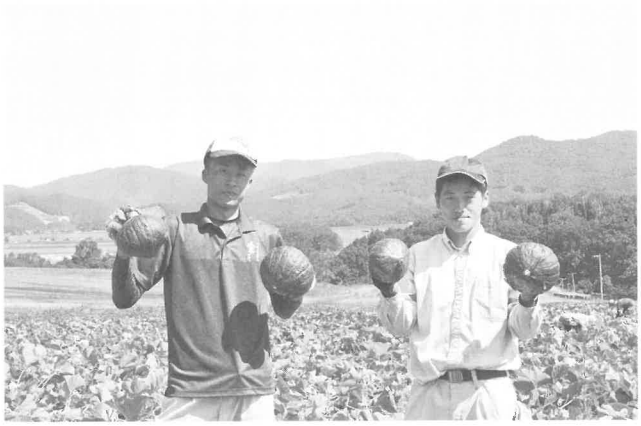
コルク状の部分を切り過ぎたり、うどんこ病の症状が軽いものは加工用にします。加工用を出荷する際には、重さが一・二kg以上のカボチャだけを二十一kg以上になるように調整して出荷しました。

その他にもスイートコーンの調整にはアワノメイガやオオタバコガの食害などの有無を確認し、重さは四百五十g以上、四百～四百五十g、四百g以下に分けて調整しました。また、コンテナに入れる際には塩水を切り取り部分につけて出荷しました。塩水をつける理由は、スイートコーンから水分を出にくくするためで、そのためもあったからか休憩の時にいただいたスイートコーンがとても甘かったです。

一週間も経てば、カボチャの収穫も一段と上達し作業効率も上がっていました。最終日にはカボチャの収穫も終わり、ハウス内の片付けや金時豆の収穫を行いました。金時豆の収穫は、機械で茎の部分を刈り切った方向を揃えながら二列を一列にまとめて、その列で一か所ずつに集めたものを軽トラックに運んで終わりました。

実習を終えて大規模農業を体験することができて本当に良かったと思えたし、農業機械も見たことないくらい大きかったです。カボチャの収穫時に機械に乗せてもらいました。その時に思ったことは、農業には機械が必要だと思いました。

また、驚いたのはマルチです。田舎



塾さんでは生分解マルチを使用していました。このマルチは土の中へすき込むことによって微生物が分解してくれるという処理の楽なマルチを使用し、マルチを剥ぐ作業を削減し工夫されていて効率的に作業していると思いました。

学ぶことの多かった北海道実習は私にとっていい経験となりました。また、この経験を生かせるように今後の実習を行っていきたいと思います。

私はこの実習を通して、実家や農業大学校とは異なる様々なことを学ぶことができました。同じところは、担い手不足だけでした。私もこの問題を少しでも解決できるよう将来は就農を考えているので、これからも農業大学校での講義や実習を頑張りたいと思います。

自治会長としての取り組みを振り返って

高知県立農業大学校
園芸学科　二年　花き専攻
学生自治会長
新橋一生

私は、昨年の二月に高知県立農業大学校の学生自治会長に就任しました。

今年度は特に行事に力を入れました。高知農大では、高知の伝統的なお祭りの「よさこい祭り」に参加したり、オランダのレンティス校との交流を毎年行っています、さらに今年度は、SNSの開設や、GAP食材を使ったおもてなしコンテスト等にも取り組みました。オランダ交流は昨年までより自治会としての関わりを深め、オランダの学生や先生を自治会のメンバーが県内の観光地に連れて行ったり、スポーツ交流などもしました。言語が異なる相手に接することの難しさを経験しましたが、片言の英語やボディーランゲージ、またスマホの変換ソフトを使うなかで、いろいろなコミュニケーション能力が付いたと感じました。また、学生が積極的に交流に関わった事によりオランダの方々にも喜んでもらえ嬉しかったです。この交流をきっかけにもっとオランダの農業について知りたい気持ちが高まり、夏にオランダ研修に参加したことも貴重な経験となりました。

よさこい祭りでは二年生が中心となり本番の半年前から準備に取りかかりました。プロジェクトなどが重なりとても忙しい中での練習となりました。特にリーダーが覚えた振り付けを他の学生に教えるのですが、覚えてもらうのにとても時間がかかりました。人によって効果的な指導方法が違うので、思い通りにいかずもめることもありました。その時、誰が悪いかではなく、なぜこうなるか、どうすれば上手くいくのかなど話し合いをして、皆で支えあいながら円滑に進むように取り組みました。このように学生全員が主体的に取り組んだ結果よさこい祭りは大成功を収めることが出来、踊り終えたときには感無量となりました。是非後輩にも、よさこい祭りへの参加を続けてもらいたいと思います。

農大祭では昨年より催しものを増やしました。お客様にどのようにしたら喜んでもらえるか、楽しんでもらうためにはどのようなことをすれば良いかを考えました。二年生は農家留学研修中で時間がなく、一年生がとても頑張ってくれました。よさこい祭りの時に一年生と二年生の連携ができていたおかげで農大祭も成功裏にできたと感じました。また、お客さんにも喜んでもらえて嬉しかったです。

GAP食材を使ったおもてなしコンテストにも参加しました。昨年はトマトでG-GAPを取得し、そのトマトを使い二〇二〇年に開催するオリンピックの選手をおもてなしするための料理を考案して作りました。ちょうど高知県にチェコ共和国のカヌーナショナルチームが事前合宿に来ていたため、実際にチェコの方にアドバイスをもらい改良を重ねることができました。実際に選手に食べてもらうとなると不安でしたが、美味しいと言ってくれたのでとても嬉しかったです。オリンピック選手と食事をする機会は私の人生にとって良い経験となりました。

このように学生が主体的に、計画を立て意見を出し合い、みんなで確認した後、実行に移し、そして終わった後に振り返ることを大切にしてきました。それを学生がSNSで発信もしました。時には自分の力の無さに落ち込むこともありましたが仲間が私をサポートしてくれ、やる気を出させてくれたため途中で投げ出さず最後まで粘り強く取り組むことができました。仲間とともに一生懸命取り組んだからこそ、仲間の大切さを再確認することもできました。また、リーダーとしての誇りを持ち堂々と先導する力も付きました。私を最後まで指導してくださった先生方、また文句も言わずついてきてくれた仲間にとても感謝しています。ありがとうございました。

オランダ研修、ホームステイ先のダン（レンティス校学生）とトマト農家視察研修

農大での経験と私の将来

高知県立農業大学校
園芸学科　二年　野菜専攻
西井康起

私の実家はショウガ、サトイモそして水稲を栽培しています。幼い頃から、農繁期にショウガや水稲の手伝いをするのが好きで、高校卒業後は地元で働きながら農業をするつもりでした。しかし、ある時農業の勉強がしてみたいと思い、携帯でいろいろと検索しているうちに、高知農大のことを知りました。その後、オープンキャンパスに参加し、野菜、果樹、花きの農業体験をしました。なかでも、キュウリの接木、オクラやピーマンの収穫体験は初めてで、農業に対する興味が強くなりました。そして、将来農業経営を行うための知識や技術を習得し、同じ農業をする仲間を作りたいと思い、入校しました。

入校すると、プロジェクトでは自分の希望する作物を栽培することが出来るので、ピーマンを選択しました。ピーマンの栽培を始めた頃は何もわかりませんでしたが、自分で実践していくうちに、整枝や施肥、防除の大切さがわかりました。自分の育てたピーマンが収穫でき出荷されていくことが嬉しく、農大でのピーマン栽培を通して、将来ピーマン栽培をしたいと思うようになりました。特に、整枝等の管理作業の違いで側枝の発生や樹勢が大きく変わっていくことがわかり、自分の管理次第で良くも悪くもなる、と感じました。

高知農大では、二年生の後半に一ヶ月半の先進農家留学研修があります。自分の研修希望であるパプリカやピーマンを栽培している会社で栽培管理や経営面について学びました。研修先は、他にキャベツ、大根等の露地野菜や水稲の栽培をしていました。何より、学校で学んだ整枝方法や収穫基準などの応用や新たな発見につながり、天敵を積極的に導入した栽培方法なども学ぶことが出来ました。高知県では天敵利用技術が進んでいるので、自分が栽培するときは導入したいと思います。最も勉強になったことは労務管理です。栽培面積が多くなると人を雇用しないといけません。その時に、「経営者は上手く人を配置し、情報共有や的確な指示が出来なければ農業経営は立ちゆかなくなる」と、教えていただきました。

八月には学生自治会が主体となって、よさこい祭りに参加しました。学生同士で協力し合うことで、協調性や団結力が強まり、「絆」を育むことができました。

また、高知農大では二〇一八年にトマトでグローバルGAPの認証を取得しました。これからの時代、当たり前に出来なければならないリスク管理などを学びました。そして、GAP認証を受けたことにより、今年の秋に「GAP食材を使ったおもてなしコンテスト」に参加することができました。この取り組みは二〇二〇年に開かれるオリンピック選手にGAP食材を使った料理でおもてなしをし日本の良さを知ってもらうことを目的としたイベントです。授業のなかで、チェコ料理の試作を重ね、実際に高知県内で強化合宿中のチェコ共和国のカヌー選手の方々に試食していただきました。外国の人と話したり、関わる機会はめったにないので良い体験ができました。

最後に、農大では作物の栽培技術を学ぶことができ、たくさんの友達ができました。本当は今すぐにでも就農して家のあとを継ぎたいのですが、社会経験が足りません。そのため、卒業後は農業法人で働きながら多くのことを学び、三年後をめどに独立し、自立した経営を行いたいと考えています。

GAP 食材のトマトを使ったチェコ料理の調理中

農業

高知県立農業大学校
園芸学科　一年　花き専攻
右城光

早明浦ダムの東側に位置する高知県本山町は「嶺北」と呼ばれる高知県の中北部、愛媛県と接する中山間地域の一角です。私は、その中の古田という集落で生まれ育ちました。実家の標高は五〇〇m程度で本山町の中でも高い場所です。夏は平地よりはいくらか冷涼ですが、冬は雪が積もることが多く、寒さが厳しい日々が続きます。冬に高知県で一般的な施設野菜を栽培しようとすると、平地より多くの暖房コストが掛かるため、平地ほどの収益は望めません。このハンディキャップから実家では期間の短い夏秋期に米ナスと水稲を栽培し、他の時期は、土木の仕事をしています。

私は実家付近の環境を念頭に置いて、一年を通し農業だけで生活をしていく方法を模索していくため、また基本的な農業技術を習得するために農業大学校に進学しました。そして、野菜以外の品目に可能性を求め、花を専攻し、様々なことを学んだ上で高校生までの自分が気づかなかった事実を知りました。

私の育った嶺北地域には規模は小さ

いですが施設花きの産地があり、花で生活している農家が居るということ、大阪や東京の大きな花市場に「土佐嶺北」という名が知れわたっているということです。そして、世界中で、嶺北地域でしか生産されていない、オリジナリティーあふれるユリ「ノーブル」の存在でした。「ノーブル」は嶺北の花として、重要な品目として、花の業界のみならず、町や高知県といった行政に携わる部署でも注目されています。

この花に関心を持った私は、調べていくうちに、「ノーブル」には大きな課題があることを知りました。ユリの切り花栽培農家は、一般に切り花用の球根を業者から購入し、切り花生産を行っています。しかし、「ノーブル」の球根は一般には流通しておらず、農家は増殖や球根養成の大半を自ら行っています。市場や花屋から注目されるこの花の最大の問題点は、「切り花の絶対数が不足している」ということでした。「切り花に使える大きさを持った十分な量の球根を確保する」ことが「ノーブル」を生産する方々の課題となっていたのです。

このことから、私はプロジェクトの課題を「特産花き「ノーブル」の効率的な球根養成と切り花栽培における炭酸ガス施用効果の検討」としました。そこで「栽培時に炭酸ガスを施用した場合、オリエンタルユリ「シベリア」の切り下球根の肥大が良好であった」という高知市の生産者が取り組んだ試験成果を基に「ノーブル」の球根養成や切り下球の再利用率のアップにも応用できないかと考えました。

このプロジェクトに取り組むにあたり、中心的な生産農家の方のご厚意や、JA、農業改良普及所の職員の皆さんの支援をいただき、試験用の貴重な球根を分けていただくことや、試験計画へのアドバイスなどをいただきました。プロジェクトは始まったばかりで、成果をお返しするのはまだ先になりますが、少しでも産地のプラスになる結果が出せればと考えています。

このプロジェクトの準備を進めている最中、実習や授業などで花の品質の良し悪しに強く影響を受ける花の単価の差を知りました。

また「ノーブル」を栽培している農家を訪問した際に農場があまり広くないことや、花だけでなく、他の作物であるショウガも栽培をしている事に気づきました。

産地の皆さんに球根の発育状況を確認してもらいました。

「この農家のようにできるだけ高い単価の作物を栽培しつつ他の作物を組み合わせることで一年を通して収入を得る方法が堅実な経営ではないか。」私はプロジェクトを通して、将来の営農方針を見つけ出す事ができました。

これから私は実家の環境で栽培することのできる作物、特に花の組み合わせを、これからの農業大学校の実習や授業を受けることで見つけ出したいと思っています。そして、卒業後は、嶺北の農家の一員となって産地を盛り上げていける存在になりたいと思います。

私のプロジェクト活動について

高知県立農業大学校
畜産学科　一年
岡田　隆誠

私は徳島県で生まれ、畜産業が行われている地域で育ちました。

私の家は、畜産業を行っていたわけではありませんでしたが、幼いころから知り合いの畜産農家の方が肥育されていた牛を見る機会がありました。その時にはまだ畜産農家になろうとは考えていませんでしたが、高校を卒業して自分が本当に何をしたいか考えたときに幼い頃から慣れ親しんできた牛を自分で育ててみたいと考え、畜産農家になろうと決意しました。

まずは徳島県や近県の畜産業を知ろうと考え、調べてみると、高知県に土佐あかうしという名前のブランド牛がいることや、その牛は脂肪がつきにくく赤身肉の割合が多いという特徴を知りました。私は土佐あかうしを知り、今まで自分が見てきた牛とは違った特徴を持っているこの牛のことについて、興味が湧き勉強したいと考えました。そこで、土佐あかうしのことについて勉強や実習ができる高知県立農業大学校に入校しました。入校後インターンシップで三日間、土佐あかうしと黒毛和種を飼養している畜産農家の所に行きました。この畜産農家ではIOTを活用し、牛の分娩を管理していました。そこで私は、プロジェクトでこのようなIOTを活用した研究をしてみたいと考えました。現在、高知県では産業振興計画による、土佐あかうしの飼養頭数を三〇〇〇頭を目指しています。そのためには、繁殖雌牛の発情を見逃さず、発情の適期に種付けすることが重要になってきます。

しかし、畜産農家の方でさえ繁殖雌牛の発情を見逃すことがあるそうです。この問題を知り、私はプロジェクトでこの問題を解決できるような研究に取り組みたいと考えました。A社が開発したセンサー付きの首輪を牛に装着することで、発情や疾病兆候といった個

土佐あかうしへの授乳作業

体情報をスマートフォンなどでリアルタイムで見ることができ、それを活用することで、発情を見逃すことが少なくなります。また、発情の適期に人工授精を施すことができ受胎率が向上します。さらにこのセンサーから送られる牛の個体情報は共有することもできます。現在このプロジェクトに取り組んでいますが、もし発情を見逃すことが少なくなり受胎率が向上したという結果が得られるのであれば、将来自分が畜産農家になった時には、この機械を導入したいと考えています。

このプロジェクトで学んだことや失敗したこと、高知県立農業大学校での実習や学習の時間に蓄えた知識と技術を活かし、卒業後は土佐あかうしを飼養している畜産農家の所に就職し畜産業に携わりたいと考えています。そこで、より実践的な知識や技術を身に付け、畜産農家になるための資金を貯めた後に、ゆくゆくは畜産農家になりたいと考えています。

このような夢を実現するためには、十分な知識と技術が必要になるため普段の実習や学習に積極的に取り組み学生の時から様々なことを体験し、将来のために役立てたいです。また、仕事は人からの信頼がないと成り立たないものであるため、私は信頼が一番大事だと考えています。そのため学生の時から日常生活での決まり事や約束事を守り、人から信頼される人間になりたいです。

父の生き方と自分の夢

香川県立農業大学校
野菜園芸コース　一年
内海　宝

『俺は農家になる！』

父が突然こう宣言したのは、私が小学校四年の時でした。

そのころの我が家は、祖父がわずかな水稲を作付する兼業農家でした。子供心にも、それだけでは生活していけないと感じ、いったい何を作るのかと聞くと、白いアスパラガスだと父は言いました。私は、それまで聞いたことも食べたこともない野菜の名前に驚きましたが、一方では、どんなものなのか、とても楽しみだったことを覚えています。

私の生まれ育った町、東かがわ市は、国内の手袋生産の九割を占める、日本一の手袋産地です。父は、その手袋業界で働くサラリーマンでした。いつもスーツ姿で、出張などで家を空けることも多く、子供の頃の私は、父が働く姿を見たことはありませんでした。

父の突然の就農宣言から一年後、我が家では二五〇〇㎡もある立派なビニールハウスが完成しました。初めて見る働く父は、作業着を着て汗にまみれていましたが、その広い背中がやけにかっこよく、何よりとても楽しそうに見えました。この時私は、将来、この仕事をしたいと強く思いました。

しかし、その翌春、事件が起こります。慣れない仕事での無理がたたり、父が体調を崩したのです。ちょうどアスパラガスは収穫の最盛期で、小学生だった私も、収穫作業に駆り出されました。ホワイトアスパラガスは朝日が昇るまでに収穫しなければなりません。朝五時に起き、眠気と闘いながら真っ暗なハウスに入りました。畝をライトで照らすと、そこには真っ白なアスパラガスが見事に育っていました。この時の感動は、今も忘れません。

このことは、野菜栽培の面白さと厳しさを知ると同時に、父の努力に感銘を受けた大きな出来事でした。その後、父の体調も回復し現在もアスパラガス栽培を続けています。

私は今、多くの社員を雇用している大規模農業法人で農家実習を行っています。この農業法人の社長は、独立就農を希望する研修生を何人も受け入れ、農業の担い手育成にも力を注いでいます。そのような社長の姿を間近に見ると、私が学ぶべきものは無限にあり、農業大学校の二年間で習得できることは、農業経営に必要な知識のほんの一部であることを痛感させられます。

一方で、私が目指す農業は、このような大規模経営ではなく、家族が協力して行う家族経営ではないかと、感じています。経営面積が小さくても高度な技術で高品質な農産物を生産する家族経営を目指したいと、農家実習を通して考えることができました。

香川県には消費者からも高い評価を受けているオリジナル品種「さぬきのめざめ」があります。さらに「さぬきのめざめビオレッタ」という鮮やかな紫色の品種もあり、これを遮光栽培するとピンク色になるそうです。

キャベツの収穫

また、農業試験場が開発した高畝式の栽培方法や、特許を取得し、香川農大の先輩も関わっている『ホワイトアスパラガス育成袋』を利用すると、作業効率の向上やグリーンアスパラガスとの同時栽培など、選択の幅が広がるという話を聞きました。

今後は、このようなアスパラガスに関する最新の栽培技術を学ぶとともに、グリーン、ホワイト、ピンクの三色栽培など、他にはない新しい栽培技術について研究したいと考えています。

少し遠回りするかもしれませんが、アスパラガス栽培に関して誰にも負けない技術や知識を身につけ、目指すべき農業経営の形を見つけたとき、夢を実現した父に負けない、産地を担うかっこいい農業者になれると信じています。

そして、私が父にあこがれたように、誰かのあこがれの存在になりたいです。

オリーブでつなぐ「人」と「島」

香川県立農業大学校
果樹園芸コース　一年
髙尾　耕大

私が生まれた香川県小豆島は、人口約二万八千人の瀬戸内海に浮かぶ離島です。温暖な気候に恵まれた小豆島のオリーブは、島のシンボルと言っても過言ではありません。古くからオリーブの栽培が盛んでオリーブオイルやオリーブの塩水漬け、オリーブオイルを使った化粧品などいろいろなオリーブ関連商品が小豆島を代表する特産品となっています。

さて、私の実家である高尾農園は、オリーブとアスパラガスの複合経営をしています。オリーブオイルは、収穫後、できるだけ早く加工しないと、風味や色、品質が落ちてしまいます。そのため、収穫してすぐに加工できるようオリーブ搾油機を導入しています。搾油と言っても、大豆油や菜種油とはその工程が全く違います。まず、手摘みで収穫したオリーブの実を人の手による丁寧な選果を行い、実をつぶし撹拌したあと、遠心分離機で油を搾ります。こうして生産した高尾農園のオリーブオイルは、ニューヨークやパリのコンテストで金賞を受賞するなど、世界からとても高い評価を受けています。また、今年、オリーブとアスパラガスの両方でJGAPを取得し品質管理を徹底しています。

私は、高校一年の春にサンフランシスコの農業を見学に行きました。

カリフォルニア米とオリーブの複合経営をする大規模農家では、タイヤの大きさが人間の背丈をはるかに超える自動走行トラクターが何台も横一列でずらりと並んでいました。

また、この地域では、高温多湿な日本と違い農薬をほとんど使わなくても高品質な作物が安定して栽培できるということでした。私はこのようにして生産された農産物が、日本に大量に輸入されたら、海外との競争に勝つことができるだろうかと考えました。

私は、この日本ならではの小規模多品目の強みを生かして外国の大規模生産には無いような品質の高い農産物を作れば、勝てると思っています。

私は、農業大学校を卒業したら三つの事をしたいと思っています。

一つ目は、高尾農園の名を世界のオリーブ業界にとどろかせることです。実家のオリーブオイルは、海外からとても高い評価をもらっています。最近では、少量ですがアメリカやフランスなどにも輸出しています。私は、他の農園には無いような特徴のある製品の開発や、他の人には絶対真似することのできないような高度な技術と、強固な高尾農園ブランドを確立していきたいと思っています。

二つ目は、グローバルギャップの取得です。実家で取得しているのは、日本の基準であるJGAPであるため、将来、世界にどんどん進出していくためにはまず、グローバルギャップを取得し世界の基準に肩を並べる必要があります。自分が作ったオリーブオイルの製品に対する信頼性を高め、輸出がしやすくなる環境を整えていきたいと考えています。

オリーブの管理作業

三つ目は、十八年間お世話になってきた様々な人に対する恩返しです。小豆島への移住希望者の中に農業をしたいと言う人がいれば、その人が思っている理想に少しでも近づけるように、栽培指導など私のできる範囲で力になって、オリーブの魅力を伝えたいと思っています。

また、小豆島に暮らす子供たちがいつでもオリーブを学べる機会を提供したいと思っています。オリーブを育てていくところからスタートして、学生など若い人が考えたパッケージやラベルで島の学生のオリジナルブランドとして販売するなど、全ての過程を経験してもらいたいと思っています。

私はこのプロジェクトを通して、オリーブに興味を持ってもらい、異業種や島内外の様々な人たちとの交流や連携を大事にしていくことで、オリーブ

を中心とした地域の活性化につなげていきたいと考えています。

将来、私は、高尾農園の次期社長となって、今までいろいろな場面で私を助けてくれた人たちに恩返しをしたいと思います。

果樹農業の魅力を若者に伝えたい

香川県立農業大学校
果樹園芸コース　一年
谷原　一吉

私は、香川県高松市にあるカンキツ農家のもとで実習をさせていただいています。そして、休憩や移動の合間に様々な話をします。その中で気になったのが次世代の農家についてです。

近年、年齢を理由に引退される方が多い中、土地だけが余り続けるという問題があります。農地の価格は下落し、借地は無料というところも存在します。農業を始めようとする人にとっては好機です。しかし、若者はなかなか入ってきません。私はこれが一番の問題だと思っています。

私は、農業大学校を卒業した後、家の果樹園を管理しつつ農業関連企業に勤めたいと考えています。そして、農業の良い点、悪い点を私自身の体験をもとに、他人にも伝わるようわかりやすくまとめ、情報発信していき、今まで農業をするという考えのなかった人たちに新たな選択肢を与えるきっかけとなりたいと考えています。

また、農業を始めようとする人たちと情報や技術を共有し、お互いの実力を高めあっていきたいとも思っています。こうすることにより、若い就農希望者のネットワークが形成され、個々の就農への意欲意識や技術の底上げが大きく期待でき、私達若い世代が同世代に伝えていくことが一番効果的なのではないかと考えています。

次に、カンキツの魅力について、消費量の少ない一〇～二〇代の若者への発信手段として効果的に使えると思ったのがＳＮＳです。これをうまく使うことで、若年層のカンキツ需要を一気に増加させられると考えます。

では、どんな魅力を伝えればよいのでしょうか。私は、何より『見た目』に一番効果があるのではないかと考えています。ここ数年、インスタグラムという携帯アプリの利用者が国内で爆発的に増えています。このアプリは、自分たちの日常で起きたことを写真や映像で発信するもので、より魅力的な写真を撮ろうと、若者たちは写りの良い被写体、いわゆる『インスタ映え』を日々求めている現状があります。

香川県のオリジナル品種「小原紅早生」は、金時ミカンという商品名で販売されるほど、その果皮は紅く、この発色の良さは人間の食欲を掻き立て、強く印象に残ります。私も初めて見たときにはどれほどおいしいだろうと強い興味がわいたことを覚えています。食味もかなり良好であり、購入者には写真とともにその味についても評価してもらうことで、さらに売り上げを伸ばすことが可能であると思います。

決して加工された写真ではないことを証明するため、そして、カンキツがどれだけの手間と愛情をかけて栽培されているかを知ってもらうため、栽培ほ場での生育段階から収穫、出荷までの過程をＳＮＳで紹介していくことにより、多くの消費者にその魅力を伝えられるのではないかと考えています。

最後に、私の農家としての夢は、自分が最もおいしいと感じる新品種を育成することです。これまで様々な品種のカンキツを食べてきましたが、それぞれの持つ個性にまずは驚き、感動はするものの、自分が育成した品種は自分の好みを色濃く反映した何にも代えがたい自慢の品種になるに違いないと思っています。

いつの日か、谷原と名のつくカンキツが市場に出回る日を夢見ています。

不知火の収穫

庭師を目指して

香川県立農業大学校
造園緑化コース　一年
野藤　日菜子

私が造園に興味を持ったのは中学三年生の時です。興味を持った理由は今となっては思い出せませんが、庭師になりたいと思い、環境園芸課がある高校に進学を決めました。

高校で造園の基礎を学んでいたある日、いつものように学校に行こうとしていた時、ちょうど祖母が読んでいた新聞の隅にあった記事に目が留まりました。ある庭師さんがイギリスの庭の祭典で賞を取ったというものです。それまで花や木を扱う仕事につきたいというくらいにしか考えていなかった私でしたが、その新聞記事で感銘を受けた時から、いつかこの人と仕事をしてみたいと思うようになりました。

目標ができたことで、造園に関する

勉強や、仕事をする上で必要だと思った資格の取得に真剣に取り組むことができました。学年が進むにつれ本格的な実習が始まり、本当に楽しくやりがいを感じました。

農業大学校の造園緑化コースに進学し、高校の時よりも専門的なことを学んでいます。最初は疲れもありましたが、実習を重ねるごとにはさみの扱いがうまくなっているのを実感し、また、剪定や刈込の技術を覚えるのが非常に楽しく感じています。

今年の夏に造園の技能検定を受けました。夏の暑い時期だったこともあり、実技の練習はとても大変でした。体感温度は三十五℃を超えており、作業環境としては劣悪でした。こんな暑い時期も、雪花の散る寒い日も、常に外で仕事をする造園という仕事の大変さを痛感しました。

さて、技能検定では、指定された作業があります。スコップで六十cmの穴を掘る。竹を寸法どおりに切る。竹垣の竹の交差部分十四か所を棕櫚縄で結束する。敷石がぐらつかないように調整する。地面に凹凸が無いように整地する。これらの作業を、施工手順はもちろん、道具を正しく使って、何より制限時間内に完成させなければならない事にとてもプレッシャーを感じました。

練習を重ねていく毎に効率よく動けるようになり、タイムもどんどん短縮しました。完成度も上がっていき、自信が持てるようになってきました。課題は庭と言えるほどのものではありませんが、作庭の基本技術で構成されており、私はその中にも美しさを感じるようになりました。

試験は無事合格し、さらに、合格者のなかで最も得点が高い者に贈られる「香川県職業能力開発協議会長賞」をいただくことができました。今年の技能検定では、実技練習をやりきったことに加え、賞をいただくことができ、大変自信につながりました。

時代は移り変わり、造園を取り巻く環境も大きく変わっていきます。昔ながらの個人宅の和風庭園が減少する一方で、地球温暖化に伴って都市の緑化事業の需要がどんどん増えています。地球温暖化防止対策のみならず、都会の人々の安らぎ空間の提供やストレス軽減など、地球だけではなく人にもやさしい緑化事業に取り組んでいる会社があります。私が庭師になりたいと強く思うきっかけとなった方が経営する、その憧れの会社に就職できるよう、これからも頑張ろうと思います。

技能検定の様子

誰もが「美味しい」というお肉の生産を目指して

香川県立農業大学校
畜産コース　一年
杉山龍優

私は、「畜産」に係わる仕事につきたいと思い、今在学している農業大学校に進学しました。きっかけは、高校時代の実習を通して、畜産の楽しさ、重要さを学んだからです。畜産に関する知識や技術習得に努め、香川の畜産業を担う大きな存在になりたいと、日々努力しています。

高校時代とは違い、畜産農家や畜産試験場の方々と話をする機会が増え、県内の畜産業の現状を知り、また、新しい情報を得ることができています。現場の生の声を聞き、経験を積むことができ、本当に農業大学校に進学してよかったと感じています。これが四年制大学との大きな違いであり、強みであると思います。

私は、畜産とはどんな職業であるのか、また、どんな目的を持って取り組むべきなのか考えてみました。

畜産は、命をいただくものであり、当たり前ですが無駄にしてはならないということ、ありがたく美味しく食べるということを消費者に伝えたいと思います。一番美味しい状態で一番美味しく料理するのが、命をいただく側として礼儀であり、また、生産者の願いだと思います。

一方で、自分が畜産を志したきっかけも、「美味しい」という言葉でした。その言葉をきっかけに僕はより一層、畜産をしたい、もっといい肉を作りたいと思うようになりました。それは、高校時代の出来事でした。様々な困難や危機に直面しながらも、黒豚一頭を丹精込めて育てました。その豚は私たちにとっては宝のようなものであり、肉にするときは様々な思いが入り混じった何とも言えない気持ちでした。しかし、その肉を食べた家族や友人、誰もが「美味しい」と言ってくれた時、自分が存在する価値や意義を感じるとともに、うれしさが込み上げてきたのを今でも忘れません。

私が「畜産が好き」というと、友人は「動物が好きな人がやるもんじゃない」と言います。しかし、それは違います。動物が好きだからこそ、愛情をこめて大事に育てることができるのです。残念なことに、日本では動物福祉に対する考え方がまだまだ十分ではありません。量より品質を重視し、家畜

を良い環境で健康に育てることで、おいしい肉の生産にもつながると考えています。

現在、酪農を営む法人で農家実習を行っています。そこでは、品質を重視して牛の健康管理や良い環境づくりのため、様々な取り組みを行っています。社長は「堆肥は宝」とよく言います。耕種農家からの注文が多く、牧場の堆肥が無くなるくらい、良質の堆肥を作っています。土壌改良材として水田に撒かれ、その水田で育った稲わらが牛の飼料になる。農産物には堆肥が必要で、畜産は農産物が必要。そんな関係がいつまでも続くよう、循環型農業にも取り組んでいきたいと思っています。

現在行われている畜産の仕組みを変えていくのはとても難しいことだと思います。しかし、同じ考えを持つ仲間が増えれば、少しずつでも変わっていくのではないでしょうか。いろいろな人とのつながりを大事にし、多くの経験を積み、自分が理想とする畜産へと変えていきたいと考えています。

誰もが「美味しい」と言ってくれるようなお肉の生産をめざし、私はこれからも成長していきたいと思います。

養豚農家での実習

「三粒の種」

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
農業生産技術コース　一年
上野将太

「三粒の種」この言葉は、「一粒は空を飛ぶ鳥のために、一粒は大地の中の虫のために、残りの一粒は人間のために。」という意味で、地球上のすべての生物の共生を唱えた農業の諺です。

私は、大阪の都市部に生まれ育ち、会社勤めを経て、現在は徳島県に移住し、農業大学校で学生として勉強に励む日々を送っています。そしてある時、前述の「三粒の種」という諺に出会い、深い感銘を受け、多くの人にこの諺の意味を知ってほしいと思うようになりました。

その理由は、私達が現代の生活の中で忘れかけている、自然の大切さを思い出させてくれると思うからです。

私達が普段口にする食べ物の多くは、農業や漁業から得られます。それらの根本にあるのは自然であり、人間は自然無くしては生きていけないと言っても過言ではありません。しかし、以前私がしていた都会での暮らしは、木々や山川よりもビルに囲まれ、必要な物は身近な場所で買える便利さと引きかえに、自然の尊さを実感する機会が少ないと感じました。

そして、近年、国連が世界で推進しているSDGsが様々な業界で注目され、人々の関心が少しずつ高まってきています。「三粒の種」はSDGsが掲げる目標にも、強く共鳴する諺であり、環境問題や気候変動への指摘が注目される昨今、「三粒の種」の言葉の意味を、住んでいる場所や職種に関係なく、広く多くの人に実感してもらうことができると思います。

ところで、私が会社勤めを経て農業大学校で学生となった背景には、海外での経験が大きく関係しています。以前勤めていた会社を退職後、語学留学と、後進国と先進国の現状を見ながら放浪する事を目的に、海外に約二年半滞在しました。オーストラリアに滞在していたある時、農場でアルバイトをしていました。当時、農業は未経験でしたが、人生経験の為にと働き始めました。

その生活は毎朝早起きで、作業内容は重労働が多く、身体のどこかが常に筋肉痛で痛むような日々でしたが、世界中の様々な国から働きにきている国際色豊かな同僚達と作業をしながらお互いの国の事を話したり、冗談を言い合いながら働くのが、日々の辛い重労働をやりがいのあるチームワークへと変えてくれました。

そして、早朝のわずかな時間にだけ見られる美しい朝焼けや、見渡す限りの地面いっぱいに霧が広がり、まるで雲の上で作業しているかのように見える幻想的な自然の美しい景色を見るのが、私は大好きでした。

以前勤めていた会社で、終日オフィス内で過ごす業務も経験した私は、農場での生活をしているうちに、苦労もあるが屋外で自然に囲まれて働く方が好きだ、そして、農業は楽しいと思うようになりました。自分が剪定作業をした圃場の木々が大きく育っていく姿や、鳥や虫や小動物達の存在を目で見て、肌で感じ、自分も地球の大自然の上で生きている生き物の一人である事を、再認識したとも言えるような感覚が、自分にはとても新鮮で、人生観を大きく変える強烈な体験となりました。

その時に感じた、作物を育てる喜びと苦労は、自分を大きく変え、成長させてくれました。

作物を恵んでくれる大自然の尊さを感じ、そして多くの輸入食料に頼らざるを得ない日本人の一人として、農業に従事する世界中の人達に対する尊敬と憧れの念が強く芽生え、心から農業

に魅了された私は、自分も日本に帰ったら農業をイチから学ぼうと心に決めました。

「三粒の種」、この言葉が、私が見てきた、美しく、豊かで、広大な自然の風景を今でも鮮明に思い出させてくれます。

そして、そのすべての場所をいつまでも美しいまま未来へ残していきたいと思わせてくれるとともに、農業を学ぶ農大生として、山積した環境問題への課題に向き合いながら、多くの人に農業の楽しさや、自然の尊さを感じてもらえるような農業をしていくことを目標に、これからも農業を夢中で楽しんでいきたいと考えています。

「一粒は空を飛ぶ鳥のために、一粒は大地の中の虫のために、残りの一粒は人間のために。」

にし阿波と阿波尾鶏

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
六次産業ビジネスコース　一年
西岡香織

私の地元である徳島県西部の地域は「にし阿波」と呼ばれています。私は「にし阿波」を地鶏「阿波尾鶏」を通して、新たな食文化の礎を築いていきたいと思っています。私が初めて阿波尾鶏と出会ったのは、高校生の頃です。地元の生産者の方から、徳島県の地鶏で「阿波尾鶏」という鶏があるということを教えてもらいました。その時に独特のおいしさがあると知り阿波尾鶏に魅了されました。

にし阿波は、標高が一〇〇～九〇〇メートルの地域に集落が点在している中山間地域です。にし阿波の特徴的な農業としては、傾斜地畑が挙げられます。厳しい環境の中、四〇〇年以上にわたり継承されてきた山村景観、そば米雑炊などの食文化、そして伝統行事などの全てが「にし阿波の傾斜地農耕システム」として、二〇一八年には世界農業遺産として認定されました。

このようにしにし阿波の農業にはまだまだ多くの可能性があると感じる一方で、耕作放棄地の増加など、課題も多くあると思います。

にし阿波の農業の中で、これから更に発展していく可能性があると私が思うのは、地鶏産業です。にし阿波や県南部では、「阿波尾鶏」が盛んに飼育されています。阿波尾鶏は、軍鶏と他の優良肉鶏を交配させ、改良して作られました。飼育には、八〇日以上と長い期間をかけていることや、一般のブロイラーよりも環境の変化に強いなどの特徴があります。このことから、気象環境が厳しいにし阿波の環境に阿波尾鶏の生産が適しているのだと思います。また、私が学んでいる農林水産総合技術支援センターの畜産研究課を中心に研究開発が行われていることを知り、少しでも阿波尾鶏の発展に貢献したいと考えるようになりました。

にし阿波で地鶏産業を発展させていくためには、地鶏としての知名度の向上とブランド化が重要だと思います。地鶏としての生産量は全国一位の阿波尾鶏ですが、名古屋コーチンなどに比べると知名度がまだまだ低いと感じます。にし阿波一帯での生産ができれば、「にし阿波の阿波尾鶏」として地域も含めたブランド化ができるようになると思います。またアピールとブランド化には、にし阿波の伝統料理とのコラボが有効だと私は考えています。例えば、阿波尾鶏を使ったそば米雑炊を提供したり、情報発信をしたりすることで効果的にアピールできると思います。このような取り組みに加え、阿波尾鶏を使用した加工品開発もポイントの一つだと考えます。工場見学をした時に、阿波尾鶏の加工品が生産されているのを見ましたが、生肉として出荷して販売するとともに、加工品として販売を拡大すれば、消費者に購入してもらいやすくなると感じました。また加工品にすることにより、切れ端なども加工原料として使用でき、食品ロス削減にもつながります。

近年にし阿波に海外からも多くの観光客が訪れています。外国人観光客の中には、ハラール処理をしないと鶏肉を食べられないイスラム教徒なども多くいます。そういった人々でも食べることができるハラールの阿波尾鶏を生産することも重要で、世界的な知名度の向上につながると思います。

私はこれまでの農大生活で畜産や養鶏産業、食品加工について学びました。そして在学中に阿波尾鶏の加工品を徳島県内の企業と共同で開発したいと考えています。特にプロジェクト課題では、阿波尾鶏の加工品開発をテーマに考えており、商品開発の知識をしっかり身につけていきたいです。

そして、農業大学校を卒業後は、にし阿波で加工品を開発する職業に就きたいです。加工品の開発では、地元にある食材を使って付加価値をつけた商品を作り、国内外を問わずもっと多くの人たちに阿波尾鶏を知ってもらい、おいしさを伝えられるように、私自身、活動していきたいと考えています。

先人達が素晴らしい伝統・文化を残してくれました。私は地鶏「阿波尾鶏」を通して、にし阿波の活性化と新たな食文化の礎を築いていきます。

徳島農大そらそうじゃの社長として

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
農業生産技術コース　二年
廣瀬雄作

私が農業大学校に入ったのは、家業である農家を継ごうと考えていたからです。

三兄弟の長男ということもあってか、農業の手伝いをする機会が多くありました。一方で、私は大の虫嫌いで、近寄ることさえできないという人間でもありました。そのため、高校卒業後は、県外の四年制大学理学部に進学し、農業とは離れた仕事をするつもりでした。しかし、大学にあまり馴染めず、また、授業にもついていけなかったため、大学を自主退学し、地元である徳島に帰ることとなりました。

手持無沙汰となった私は、両親や祖父母に言われるがまま、農業の手伝いをしていました。手伝いをしていると、農業をすることに楽しさを覚えることが多くなりました。そして、「農業を勉強し、家業を継ごう」と決意し、徳島農大に入学することとなりました。

さて、私が通っている徳島農大には、「徳島農大そらそうじゃ」という模擬会社があります。校内での準定期産直市「きのべ市」や、校外での販売研修である「出張きのべ市」を行っており、県内外で積極的に販売活動を行っています。私は、「そらそうじゃ」の代表取締役社長として、一年間活動してきましたが、この経験は私にとってかけがえのないものとなりました。

新鮮な野菜をお手頃な価格で販売し、お客様とコミュニケーションを図りながら、「ものを売る技術」を日々磨いてきました。また、校外のイベントに参加することで、多種多様なお客様と触れ合うことができ、販売の楽しさや難しさといったことを学ぶことができました。そういったお客様への対応の他にも、金銭の運用についてや、加工品の開発・試作、販売する野菜の出荷調整なども経験できました。「そらそうじゃ」の活動を通して、社長として、役員の中で異なる意見を取りまとめたり、販売状況を改善するべく、気づいた点を問題提起したり、社員のみんなとディスプレイの仕方や、宣伝方法を考えるなど、「そらそうじゃ」をより良くするために取り組みました。

一方で、代表として至らぬところも多々あり、社員の皆に迷惑をかけたことも数えきれないほどありました。社員の皆と試行錯誤した日々を思い出す度、社員の皆が、「そらそうじゃ」をよりよくしようと共に努力してくれたことに感謝しています。一年間という短い期間ではありますが、非常に貴重な経験をさせていただきました。十代目の社長として、大きな成果を残せたとは到底思えませんが、地道な努力が一年生たちに繋がっていくと同時に、「そらそうじゃ」のさらなる発展を期待したいと思います。

徳島農大生としての二年間は、非常に楽しい一方、苦労の多いものだったと思います。この二年間が充実していたのも、先生方や仲間が支えてくれたからだと思っています。二年間で経験した、農大学生としての生活や、「徳島農大そらそうじゃ」の代表としての活動を、今後の仕事に生かしていきたいと思っています。